

加賀藩と前田家の文化政策

現在の石川県として知られている地域は、かつて加賀藩の一部であった。江戸時代（1603-1867）に、将軍の権限下にあった約 250 の自治領の一つである。加賀は、1583 年から 1871 年の廃藩置県まで、前田家 14 代が統治した。加賀の伝統工芸の育成に力を注ぎ、その遺産は石川県の文化に脈々と受け継がれている。

加賀藩は広大で、農業が盛んな地域であった。藩の財産は米を中心とした農作物の生産量で決まるため、前田家の収入は幕府の総収入に次ぐ豊かな藩であった。

江戸時代に入る前、日本は何世紀もの間、独立した武将たちの中で争いが絶えなかった。16 世紀末に徳川家が台頭し、江戸を拠点に幕府を開いた。徳川家は、富が増えれば、兵員の動員や装備のための資源も増えることを十分認識しており、前田家のような富裕な領主が忠誠心を失い、反乱を起こせば、大きな脅威となりうることをよく知っていた。

前田家もまた、自分たちの富が将軍の政敵とみなされることを懸念していた。そこで前田家は、能楽、美術、茶道など非軍事的な分野への投資をするという抜け目のない政治路線に乗り出した。この政策により、一族は将軍家の寵愛を受け、官職に就くことができ、金沢は都から遠く離れていながら、地方の中心都市へと変貌を遂げた。同時に、文化的な影響力を高めることは、藩の独立性を主張し、幕府の支配を相殺する平和的な方法であった。

前田家の文化政策は、大きく分けて「収集」と「育成」の二つに分けられる。美術品の収集は、藩主の威信を高めるために行われた。これは武士の間では常識であったが、前田家は裕福だったため、他の大名よりも多く日本各地の名画を数多く所有した。しかし、前田家は単に収集するだけでは満足しなかった。地域の芸術や工芸を振興することを領国経営の基本としていた。加賀藩は、支援や土地を提供することで、全国の優秀な職人たちを呼び寄せた。加賀蒔絵をはじめとする石川県の工芸品の多くは、前田家の招きで京都や江戸から金沢に移り住んだ職人たちによって確立されたものである。

中でも、金沢城の甲冑修理場を、加賀藩御細工所と呼ばれる多分野の工芸工房に変えたことは、大きな影響力を持つことになった。歴代藩主の資金援助により、芸術家たちは技術を磨き、後継者を育成し、境界を越えるプロジェクトや名作を共同制作したのである。5 代藩主・前田綱紀

（1643-1724）は、全国の当時の工芸の見本を幅広くまとめたものを作成するよう促した。それは百工比照として知られ、加賀藩の工房の職人たちの教育・啓発に役立てられた。今日の石川県の漆器、金工、木工を定義する多くの重要な技術は、この革新的な施設から生まれた。